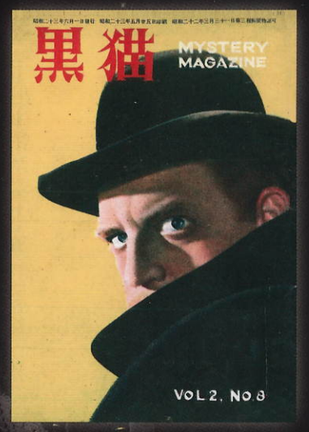
MYSTERY MAGAZINE

黒猫 復刻版



甦る珠玉のミステリ・マガジン

詩人だったポーは、スリルとサスペンスという材料を使って新しい詩を書いた それが探偵小説の誕生だった——そう語りかける本誌は、「ポーが黒猫を書いた時と同じ情熱をもって」1947年4月に創刊された。探偵小説への禁圧が解けたこの時代、乱歩は探偵作家クラブを結成し、新人作家が台頭して、多くの佳作が生まれた。

戦後混乱期に全11号を発行した本誌のダーク・ロマンティシズムを、当時の造本のままに復刻する。

◎監　修　浜田雄介（成蹊大学文学部教授）
◎解　説　石川巧（立教大学文学部教授）
◎体　裁　B6判・並製（化粧函入）
◎冊　数　全11冊＋別冊1
◎別　冊　解説・総目次・執筆者索引
◎定　価　本体45、000円＋税（分売不可）

ISBN978-4-906943-92-0

2014年12月刊行

三人社

全巻完結！

猟奇

◎監　修　浜田雄介（成蹊大学文学部教授）
◎解　説　小松史生子（金城学院大学文学部教授）
◎体　裁　A5判・上製・総約2、430頁
◎推　薦　芦辺拓（推理作家）
　　一柳廣孝（横浜国立大学教育人間科学部教授）
◎揃価格　本体120、000円＋税
◎原本提供　神奈川近代文学館
◎第1回配本　本体60、000円＋税
◎第2回配本　本体60、000円＋税

残部僅少

黒猫 復刻版概要

◎監　修　浜田雄介（成蹊大学文学部教授）
◎解　説　石川巧（立教大学文学部教授）
◎体　裁　B6判・並製（化粧函入）
◎冊　数　全11冊＋別冊1
◎別　冊　解説・総目次・執筆者索引
◎定　価　本体45、000円＋税（分売不可）

ISBN978-4-906943-92-0

※この函に全冊を収納します。

編集兼発行者
伊藤　逸平

主要執筆者一覧

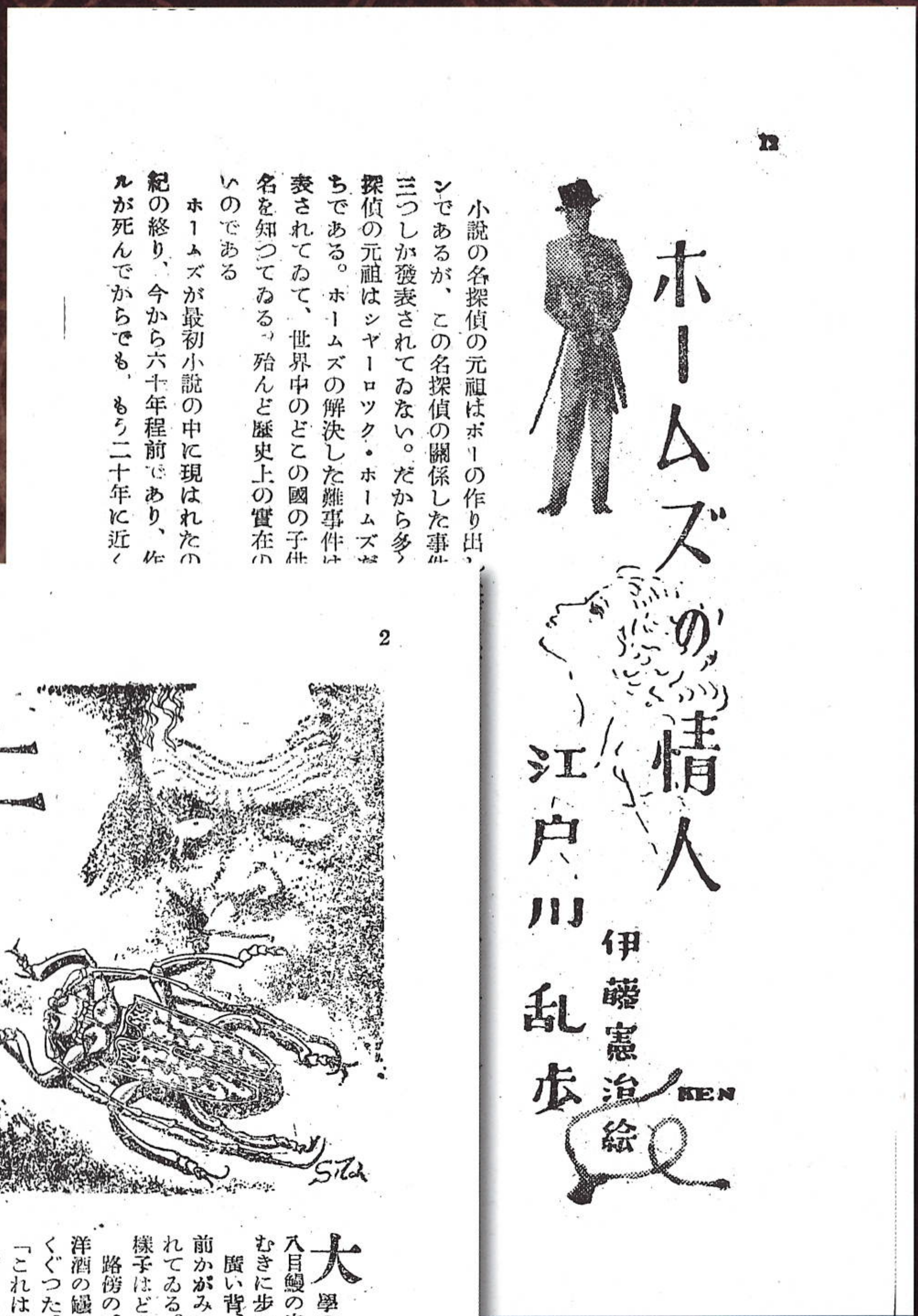
蒼井　雄	城　昌幸	東　震太郎	武田　武彦
天城　一	田村　幸彦	伊丹　欣也	田村泰次郎
乾　信一郎	徳川　夢声	岩田　賛	野川　香文
石見　為雄	氷川　瓏	江戸川乱歩	双葉十三郎
大下宇陀児	水谷　準	香山　滋	横山　泰三
河野　鷹思	横山　隆一	木々高太郎	吉田　健一
坂口　安吾	渡辺　啓助	島　久平	渡辺紳一郎
島田　一男			

三人社
〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町4　白亜荘
電話 075-762-0368
FAX 075-762-0369
振替 00960-1-282564

●表示はすべて税別

※図書館様・書店様へ
小社は少部数出版のため取次口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。

内容見本（原寸）



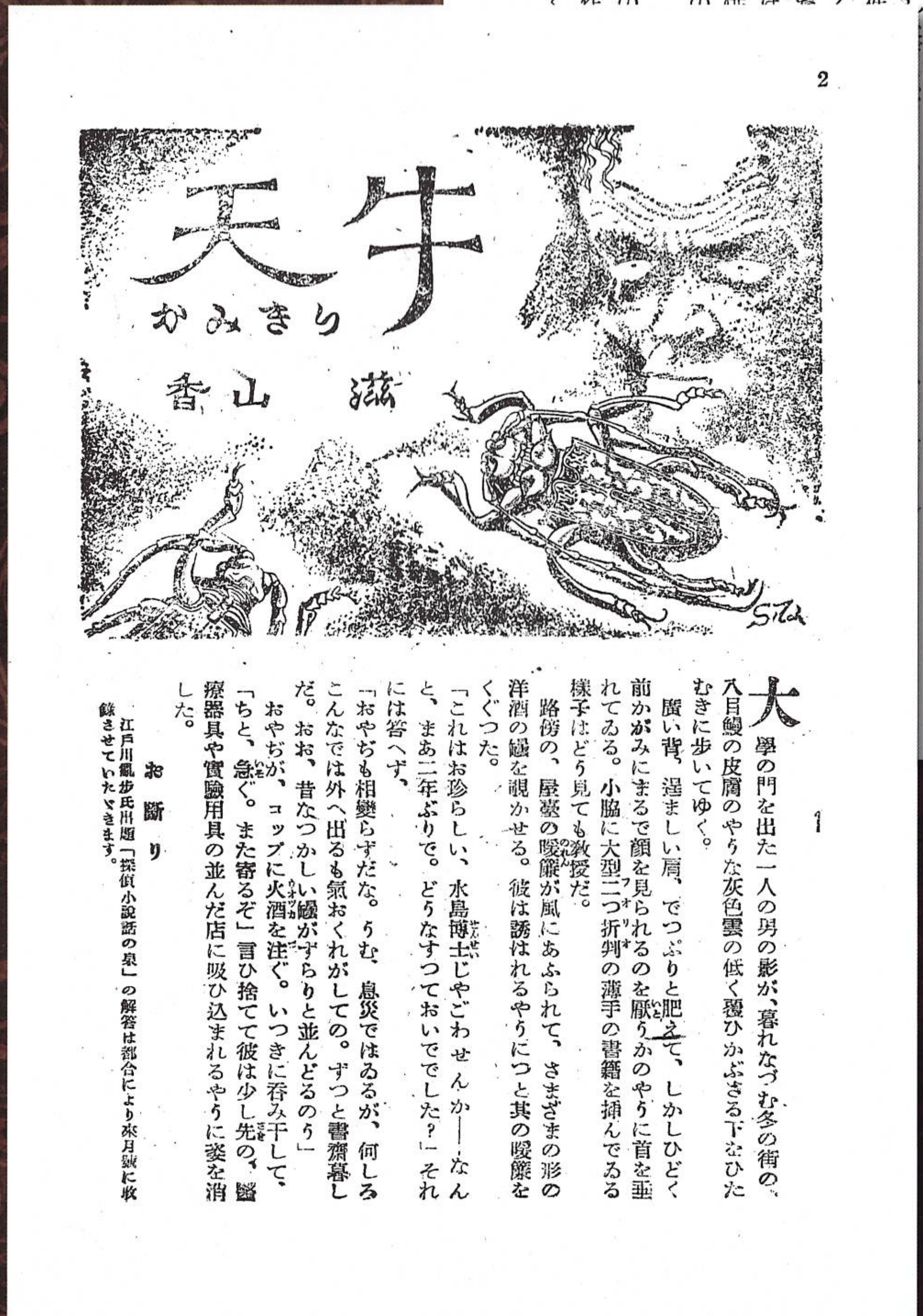
12

ホームズの情人

江戸川乱歩

伊藤憲治絵

小説の名探偵の元祖はポーの作り出
ンであるが、この名探偵の關係した事件
三つしか發表されてゐない。だから多く
探偵の元祖はシャーロック・ホームズだ
ちである。ホームズの解決した難事件は
表されてゐて、世界中のどこの國の子供
名を知つてゐる。殆んど歴史上の實在の
いのである
ホームズが最初小説の中に現はれたの
紀の終り、今から六十年程前であり、作
ルが死んでからでも、もう二十年に近く



2

天牛

かみきり

香山滋

1

大學の門を出た一人の男の影が、暮れなづむ多の街の、八目鰻の皮膚のやうな灰色雲の低く覆ひかぶさる下をひたむきに歩いてゆく。

廣い背、逞ましい肩、でつぷりと肥えて、しかしひどく前かがみにまるで顔を見られるのを厭うかのやうに首を垂れてゐる。小脇に大型二つ折判の薄手の書籍を挿んでゐる様子はどう見ても教授だ。

路傍の、屋臺の暖簾が風にあふられて、さまざまの形の洋酒の罎を覗かせる。彼は誘はれるやうにつと其の暖簾をくぐつた。

「これはお珍らしい、水島博士じやごわせんか――なんと、まあ二年ぶりで。どうなすつておいででした？」それには答へず、

「おやぢも相變らずだな。うむ、息災ではゐるが、何しろこんなでは外へ出るも氣おくれがしての。ずつと書齋暮しだ。おお、昔なつかしい罎がずらりと並んどるのう」

おやぢが、コップに火酒を注ぐ。いつきに呑み干して、「ちと、急ぐ。また寄るぞ」言ひ捨てて彼は少し先の、醫療器具や實驗用具の並んだ店に吸ひ込まれるやうに姿を消した。

お断り

江戸川亂歩氏出題「探偵小説話の泉」の解答は都合により來月號に收録させていただきます。

監修の辞

占領下の黒い美しいけもの

浜田雄介〈成蹊大学文学部教授〉

『黒猫』は創刊の辞を社長の上村甚四郎が書き、伊藤逸平が編集兼発行人、河野鷹思が表紙を描いている。『VAN』のスタッフである。写真と漫画を主要な武器とした総合風刺雑誌『VAN』の洗練されたスタイルと批評の視点は今日も評価が高いが、そのセンスとミステリーとが融合したところに『黒猫』は誕生した。

『VAN』にも文章を寄せていた江戸川乱歩は「伊藤逸平君が探偵小説好きであった為に、同社の片手間仕事として」『黒猫』発刊にいたったと回想するが、編集室の隣に探偵作家のクラブの事務所が置かれ、毎土曜日に江戸川乱歩、水谷準が在室するなどという贅沢は、「片手間仕事」ならではの、自由に満ちたエネルギーを彷彿させよう。

有力なスタッフや院外団は、ミステリー作家においても挿絵画家においても、ベテランから新進まで、実力のある執筆者を誘い込む。そんな雑誌は、しばしば楽しい実験場である。たとえば私自身にとって新鮮だったのは、水谷準の作品を桂ユキ子の挿絵で読む、というような体験であった。

併走する『VAN』や『ポピュラー・サイエンス』からも、イヴニング・スター社には新時代への野心的な眼が感じられるし、『黒猫』において想定されていたそれは海外作品の紹介であっただろう。だが、昭和二二年という創刊の年は、ベルヌ条約の翻訳権をめぐる混乱があり、また海外との資金移動即ち契約が実質不可能な占領下の現実があった。

そして一方では、圧倒的な力を持ちながら正体の見定めにくい大衆の欲望があった。終刊となる号の編集後記が語る日本の現実は、言い古された議論に見えて、やはり戦後社会の中でのミステリーが考えなければならない問題ではなかったか。

小雑誌ながら魅力と問題性のつまった『黒猫』の復刻を喜ぶ次第である。

推薦の辞

ひと味違った探偵小説専門誌

山前　譲〈推理小説研究家〉

今見れば、一九四七年春に発売された創刊号は、まさに吹けば飛ぶようなものかもしれない。用紙不足の時代とあって八十ページほどしかなく、しかもB6判ほどの小ぶりである。本文用紙の質は悪く、手にしてみるとじつに軽い。本当に風が吹いたら飛んでしまいそうである。はたして当時、どれほどの読者の眼に止まったのだろうか。いや、それは余計な心配なのだ。前年に専門誌として、「ロック」、「宝石」、「ぷろふいる」などが次々と創刊され、探偵小説ブームが訪れていた。戦時中の飢えを癒やそうとしていたファンには、誌名とは裏腹に、「黒猫」は輝いて見えたことだろう。

その創刊号の目次は、保篠龍緒らの小説のほか、江戸川乱歩や木々高太郎のエッセイ、あるいは対談と、じつに賑やかである。「黒猫」は翻訳探偵小説雑誌にする予定だったという。ただ、占領下の日本では海外の著者との交渉もままならず、それはかなわなかったのだが、海外情報に目を配った編集と、他誌とはちょっと違うモダンな表紙が、その創刊意図を反映している。

乱歩は毎号のように評論を寄稿した。高太郎、水谷準、渡辺啓助、城昌幸、大下宇陀児といった戦前派の大家はもとより、岩田賛、天城一、島久平、香山滋といった戦後派の有力新人たちの小説も掲載されている。終戦直後の混乱する出版界のなかで短命に終わってしまった「黒猫」だが、ファンには毎号楽しみな雑誌だったに違いない。

全十一冊収録内容一覧

1

■第一巻第一号
最後の運転　岩崎久
ホームズの情人　江戸川乱歩
犯罪隠語解　アルセーヌ・ホームズ犯罪局
クロフツとクリスチ女史　渡辺紳一郎
前科者　トーマス・マック
指紋　保篠龍緒
法医学と探偵小説　木々高太郎
蝙蝠屋敷　東海次郎
「黒猫」発刊に添へて　上村甚四郎
ガス燈　田村幸彦
海外探偵小説四方山話　江戸川乱歩、木々高太郎、水谷準

2

■第一巻第二号
黒いカーテン　薄風之助
憂愁の人　城昌幸
デイケンズの推理短篇　江戸川乱歩
楽しみの為の殺人　リチャード・ヒューズ
怪樹　志摩夏次郎
名探偵アリババ　栗須亭
謎の下宿人　田村幸彦
四七年度のベスト・ジャズ　野川香文
推理試験
三つの姓名の女　水谷準

3

■第一巻第三号
死の接吻　木々高太郎
黒猫QUIZ　渡辺紳一郎
毒薬　武田武彦
音の秘密　ホフマン
奇術師探偵　江戸川乱歩
名探偵アリババ　栗須亭
二つの実話
「トスポット」テッドは死んだか？
間違って死刑になった男　ドクター・ワトスン・ジュニア
影なき殺人　田村幸彦
近代探偵小説論［一］　リチャード・ヒューズ

4

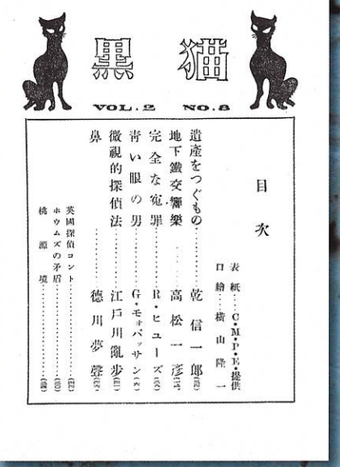
■第一巻第四号
窓の半身像　渡辺啓助
影　エドガア・アラン・ポオ
沈黙　エドガア・アラン・ポオ
三つめの棺　蒼井雄
湖中の女　伊丹欽也
ジャズの新しい傾向　野川香文
スリラー劇場風景　石見為雄
趙少濂の遺書　東震太郎
大いなる時計　江戸川乱歩
近代探偵小説論［二・完］　リチャード・ヒューズ

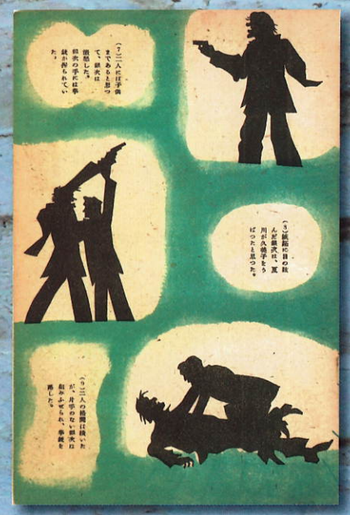
5

■第二巻第五号
瞑る屍体　耶止説夫
風車　岩田賛
巴里の地下街を往く　石見為雄
密室の魔術師　双葉十三郎
歌姫綺譚　ゲーテ
女性と推理小説　江戸川乱歩
舞踏会の女　武田武彦
白い蝶　氷川瓏
米英女流探偵小説作家を探偵する［一］　二宮栄三
鉄砲横丁殺人事件　Dr・ワトソン・ジュニア
失はれた週末　伊丹欽也

6

■第二巻第六号
死人には口がある　リチャード・ヒューズ
鬼面の犯罪　天城一
黒死館の怪奇二つ　木々高太郎
街の殺人事件　島久平
ダイヤと国際列車　吉良運平
二十の扉のかんと推理　大下宇陀児
探偵小説話の泉　江戸川乱歩
四次元の犯人　島田一男
米英女流探偵小説家を探偵する［二・完］　二宮栄三
ベデリア　東海次郎





7

■第二巻第七号
天牛　香山滋
些細な事ほど大事である　R・ヒューズ
民国裁判一くち話　夏目原人
世界の牢獄を破つた男　青江耿介
バンゴ　アーネスト・ホープライト
ヘイクラフト「推理小説史」　江戸川乱歩
失われたアリバイ　天城一
三人と一人の殺人　大下宇陀児

8

■第二巻第八号
青い眼の男　ギイ・ド・モォパッサン
地下鉄交響楽　高松一彦
シャアロック・ホウムズの矛盾　山中長七郎
完全な冤罪　R・ヒューズ
遺産をつぐもの　乾信一郎
微視的探偵法［一］　江戸川乱歩
鴨　ハロウエイ・ホーン
鼻　徳川夢声
探偵小説話の泉解答　江戸川乱歩

9

■第二巻第九号
夢見る　城昌幸
探偵小説を截る　坂口安吾
上陸作戦　ホロウエイ・ホーン
知らぬが仏　ミツチエル・ジエコット
人間修繕　乾信一郎
屍体のない殺人
屍体のない殺人を読んで　松下幸徳
セイント病院殺人事件　高松一彦
微視的探偵法［二］　江戸川乱歩
有翼人［一］　香山滋
高嶺の花

10

■第二巻第十号
蟹の足［一］　大下宇陀児
幸運の落書　キャサリン・ヘウィット
広場の一隅で―　F・C・メンツェンガー
小さな正義　ノラ・ロイド
反射鏡　G・C・ソンプソン
空とぶ円盤　ジョン・フライド
微視的探偵法［三・完］　江戸川乱歩
満月の記録　水谷準
有翼人［二］　香山滋

11

■第二巻第十一号
蟹の足［二］　大下宇陀児
肉体論と犯罪　田村泰次郎
美人の運命　北町一郎
きのことローマ皇帝　XYZ
ヴィアル夫人の幽霊の出現　田内長太郎
謎の下宿人　ホロウエイ・ホーン
リアリスト　J・フアージョン
夢の夢　ロージャー・ウッデイズ
ロカルノの乞食女　クライスト
裸婦と壺　東震太郎
操作と失踪の闘争―帝銀事件について　轡田三郎
有翼人［三・完］　香山滋